

本探しは宝探し

大学院人間・環境学研究科修士課程1年 亀田 勇一

図書館や図書室には、誰からも忘れ去られた数多くの古い本が眠っています。時が止まったような書庫の中で、再び見出されるのを待っている本たち・・・特定の資料を目指してではなく、そういう本との出会いを求めて書架の間を歩くのは私の密かな楽しみでもあります。最近では電子化が進み、わざわざ足を運ばずとも済むことが増えましたが、それでも暇を見つけて図書を眺めているのはひとときの安らぎであり、温故知新という忘れかけた言葉を再認識する時間であると感じています。本稿では「利用者の声」ということで、そんな例を二つほど紹介したいと思います。

附属図書館には『片田文庫』という一群の図書があります。開架にあり、洋書と同等の規模を誇りながら何の説明もなく、全ての本に「片田清氏寄贈」と書かれている。おそらく多くの利用者にとっては謎のスペースでしょう。少し調べてみた処、片田氏は京都の高校で英語を教えていたようです。本の蒐集が趣味で家一軒が埋まるほどの蔵書があったそうですが、独身だったため亡くなった後に引き取り手がいませんでした。そこで、京大にたくさんいたかつての教え子達により全てが寄贈され、現在の姿になったということです。片田文庫の半分以上はKH(全集)で占めており、研究目的ならずとも眺めてみると面白そうな本が並んでいます。現代の作家はよく知りませんが、古典の有名なものは大抵揃っているのも、試験期には息抜きと称してこれらを読み漁ります。高校で半強制的に読まれた時には気付かなかった表現や心理描写の巧みさに感心し、自分が理学部生であるのも忘れて周りの人に薦めたのを覚えています。

もうひとつ、自分の専門分野の本と出会える

のが理学部動植物図書室です。この図書室の雰囲気がとても好きで、理学部にいた頃もよく足を運んでいました。まず扉を開けると、司書の方がにこやかに挨拶をしてくれます。しかしここからが他と違う点で、机や本棚の上、棚の空きスペースには貝殻や種子、様々な標本や生物の模型が所狭しと並べられ、どこか懐かしさを感じさせる不思議な空間になっています。開架の本は多くはありませんが、必要な図鑑類は一通り揃っているうえ地下の書庫には雑誌とともに古い書籍や非売品の図鑑等も収められていて、野外調査の前にも立ち寄るとなにかがしかの収穫があります。ここでは自分の専門である貝関係のものしか探したことはありませんが、古い文献には研究以外に研究者の心得や生物の魅力を熱く語った文章が多く、本を開くのが楽しくなります。例えば、最近見つけた蝸牛の本では、海の貝に比して地味である蝸牛の魅力を侘び寂びの心と結びつけて切々と語っていて、貝の解説よりもこの文章に心血を注いでいるのでは、と思わせるものがありました。こんな本が最新の文献と隣り合わせで置いてあるのを見つけるのもまた、書庫内検索の楽しみといえるでしょう。

近年図書館のあり方は大きく変わりつつあります。必要な新しい文献がオンラインで手に入るようになる一方、それ以前のはこれまでと変わらず書庫に眠っていて、検索が相対的に面倒になるため足が遠のいてしまいがちです。しかしたまには、図書館に立ち寄って埃をかぶった本をめくってみてはいかがでしょう。そのちょっとした余裕が、新たな発見につながることであって、あるかもしれませんよ。

(かめだ ゆういち)